

令和3年度 国立中央青少年交流の家 教育事業
大学生のためのボランティア活動推進事業（ボランティア自主企画事業）

にじいろキャンプ

令和4年1月9日（日）～1月10日（月・祝） 1泊2日



○目的

- ・当施設から自主企画を行うボランティアへのねらい
 - 法人ボランティアが中心となって企画・運営をし、対象者理解や、業務の進め方などを通して、社会人基礎力の向上を目指す。
- ・企画ボランティアが企画した事業のねらい
 - 他者と出会い、さまざまな活動を通して、協調性やコミュニケーション能力を育む。また、中学生期に向けたスムーズな接続を図る契機とする。

○参加者

□企画運営法人ボランティア

5名（男性2名 女性3名 内訳:大学3年生3名 大学2年生1名 大学1年生1名）

□参加者

小学校6年生 4名（申込人数7名）

○本事業の仕組み

当施設で活動している法人ボランティア5名が企画ボランティアとなり、事業のねらいを設定し、そのねらいを達成するためのプログラム、2日間の事業の流れを話し合い決定した。また、当日の運営も企画ボランティアと社会教育実習生が協力して行った。

○当日までの流れ

7月下旬	企画ボランティア募集・決定
8月下旬	機構本部、自主企画事業支援プロジェクトへ申請・採択
9月上旬	事業企画書作成及び開催要項・チラシを作成
11月下旬	次長・所長へのレクチャー・チラシ発注・広報開始
12月中旬	参加者決定・二次案内発送
12月下旬	フィールドチェック
事業前日	集合・最終準備
1月9～10日	本番

※上記以外にも企画メンバー5名が日程を合わせ、オンライン会議や大学内での会議を行った。

○キャンプ当日の運営

当日の運営は、5名の企画ボランティアを中心に行い、班付きカウンセラーを社会教育実習生が担った。前日準備の進行や、事業概要説明なども企画ボランティアが行い、当日に備えた。

当日は天候に恵まれたため、有意義な活動を行うことができた。

○2日間の様子



開会式



アイスブレイク



カラーボールサバイバー



ナイトプログラム



思い出を形に

○キャンプを終えて

《企画ボランティアの感想》

- ・企画を進めていく中で、企画メンバー全員が参加者のことを思って内容を考える時間にやりがいがあり、楽しさを感じた。
- ・「こうしよう」と思った時に、実際どうなるかという想定が甘かった。
- ・「企画でこんなことを考えていたが、実際はこうだった」という体験は、企画段階から参加しなければ体験できない。そこから実際に参加者の様子を見て活動を追加したり変更したりすることも必要であり、指導者は参加者の様子を常に見る目が必要であると感じた。

《成果と課題》

○成果

- ・事業企画段階から携わることで、対象者の理解や、それに見合ったねらいの設定など、企画のプロセスや業務の進め方を学ぶことができた。
- ・企画ボランティアが全てのプログラムを指導したことにより、指導力の向上を図ることができた。
- ・参加者集めに苦慮し、企画ボランティアが各々その理由を考え、広報手段を再考するなど、不測の事態に対応する機会となった。

○課題

- ・昨年度の反省を生かし、早い時期から企画会議をはじめられるよう進めたが、企画期間が長すぎて、企画ボランティアのモチベーションを保つことができなかった。
- ・学業やアルバイトなど、普段から忙しい大学生5名の時間を調整することが困難で、オンライン会議が深夜になってしまうことが多かった。